



かぶとくんのおかあさん

きのこおかあさんのために



きのこおかあさんがかぜをひいてしまった。ねつもたかく、あたまもいたいらしい。

「ちようどよかった。きようはおれがやすみだから、しっかりとやすみなよ。」

「わたし、おかあさんのかわりにおふろをあらってくる!」

「それならおれ、ゴミをすてるよ。」

「おとうさんは、おかあさんのおかゆをつくるぞ。」

きゆうにみんないそがしくなって、ぼくはひとりぼっちになっちゃった。

ぼくはきのこおかあさんになにをしてあげられるだろう。

ぼくはまだ、おふろあらいも、おりようりも、ゴミをすてることもできない。ぼくもなにか、きのこおかあさんのやくにたちたいな。

ぼくはおへやのなかをさがしてみた。そして、すごくすくまよって、クレヨンとかみをえらんだ。げんきなきのこおかあさんのかおをかいて、はやくなおしてもらおうとおもった。

「あれ?おかあさんのかみのけ、こんなながくないかなあ?」

「あれ?おかあさん、もっとめがおおきいかなあ?」

「あれ...?」

ぱつとめがさめると、きのこおかあさんのおふとんのなかにいた。きのこおかあさんはもういない。

「かぶと!おはよう。」

いつものきのこおかあさんだった。

「かぶとのえをみて、すっかりなおっちゃったよ。」

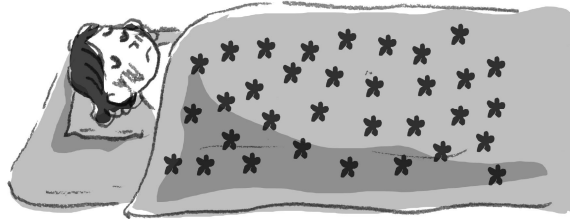
いつもよりへたくそなぼくのえが、きれいにかざられてあった。

きのこおかあさん、おかあさんってすごいね。

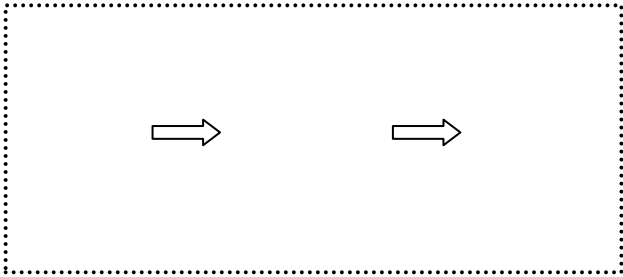
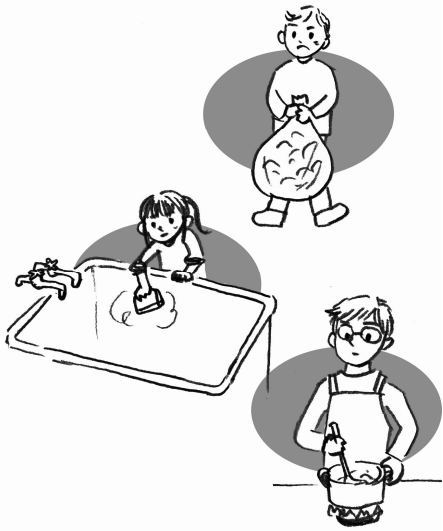
①



②



③



①

か

②

ね

③

え

ぜ

つ